



児童養護施設等退所者への支援を充実します！！

～児童養護施設等退所者向け生活ハンドブック「船出のためのナビ」の作成等について～

平成29年6月、京都市では、「児童養護施設等退所者の生活状況及び支援に関する調査」（以下「調査」という。）を実施し、退所者の状況把握に努めてまいりました。

この度、本調査により見えてきた様々な課題等に対し、新たに作成したハンドブック「船出のためのナビ」を共通のツールとして、関係機関と密接な連携のもと、入所中から退所後まで切れ目のない支援に取り組んでまいりますので、お知らせします。

1 生活ハンドブック「船出のためのナビ」の作成 **新規**

昨年実施した調査において、施設退所者の多くが、退所後に生活していくうえで分からないことが多くあるなかで、不安や困りごとを抱えながらも、頼る大人も少なく、孤独を感じ、さらに孤立してしまうなど大変厳しい状況が明らかとなりました。

これを受け、京都市では、社会生活を送るうえで必要な知識等を身に付けるとともに、自立に向けてどのような施策等があるのかを知ってもらうため、マンガ形式の生活ハンドブック「船出のためのナビ」を発行します。

(1) 配布開始

平成30年3月26日（月）

(2) 配布先

児童養護施設、児童心理治療施設、母子生活支援施設、自立援助ホーム、ファミリーホームの入所者及び退所者 等

(3) 編集委員会の立ち上げ

京都児童養護施設長会、京都市ユースサービス協会、京都市社会福祉協議会から構成される「編集委員会」を立ち上げるとともに、約20団体から御意見をいただき、同志社大学漫画研究会及び児童養護施設を退所する方の協力も得て作成。

※ 自治体が、「編集委員会」を立ち上げて施設退所者向けのハンドブックを作成するのは政令市初です。

※ 編集委員会の皆様から、(参考1)のとおり御推薦をいただいています。

(4) 主な掲載内容

実際に起こりそうな事例を交え、以下、8つの項目に分けたうえで、児童が読みやすいようマンガを使って分かりやすい言葉で掲載しています。

- ① ひとり暮らし（入居物件の契約手続等）
- ② お金（銀行口座の開設、カードローンの知識等）
- ③ ハラへった（お米の炊き方等）
- ④ なんかにヒマ、なんかにさみしい（青少年活動センターの活用等）



- ⑤ 仕事（ハローワーク，労災の知識等）
- ⑥ 役所とか（医療保険，年金の知識等）
- ⑦ 緊急事態発生（病気，事故，火災時の対応方法等）
- ⑧ お祝い・おくやみ（冠婚葬祭のマナー）

(5) 発行部数等

1, 500部（B5版 カラー 94頁）

(6) その他

本冊子は，以下URLから閲覧できるほか，京都市子育てアプリ「京都市はぐくみアプリ」でも閲覧できます。

URL：<http://www.city.kyoto.lg.jp/hagukumi/page/0000233909.html>

2 生活ハンドブックの活用と連動して取り組む本市の主な独自支援策

(1) 新たな相談窓口の追加（実施済み）

平成29年9月，市内7箇所の青少年活動センターを退所者の相談窓口として追加し，退所者の相談体制を整えています。

(2) 居場所の確保（実施済み）

平成29年11月，退所者の孤立を防ぐため，同じ境遇を持つ退所者が集まる「鍋」や「たこ焼き」など楽しむ交流事業を開催するなど，居場所（南青少年活動センターに1箇所）を確保しています。

(3) 支援コーディネーターの配置 **新規** ※平成30年度実施

児童養護施設（7箇所）及び児童心理治療施設（1箇所）に各1名の支援コーディネーターを配置し，退所後の自立に向けた計画的な支援を実施するとともに，退所者が日々の生活で抱える不安や悩みについても相談に応じていきます。

(4) 生活・居住支援の実施 **新規** ※平成30年度実施

退所後も安定した生活環境を提供するため，大学進学した場合の生活費及び居住費を本市が支給するとともに，在籍していた施設等において，原則22歳まで居住の場を提供します。

【参 考】

○ 「児童養護施設等退所者の生活状況及び支援に関する調査」概要（参考2，3参照）

(1) 調査期間

平成29年6月9日～7月14日

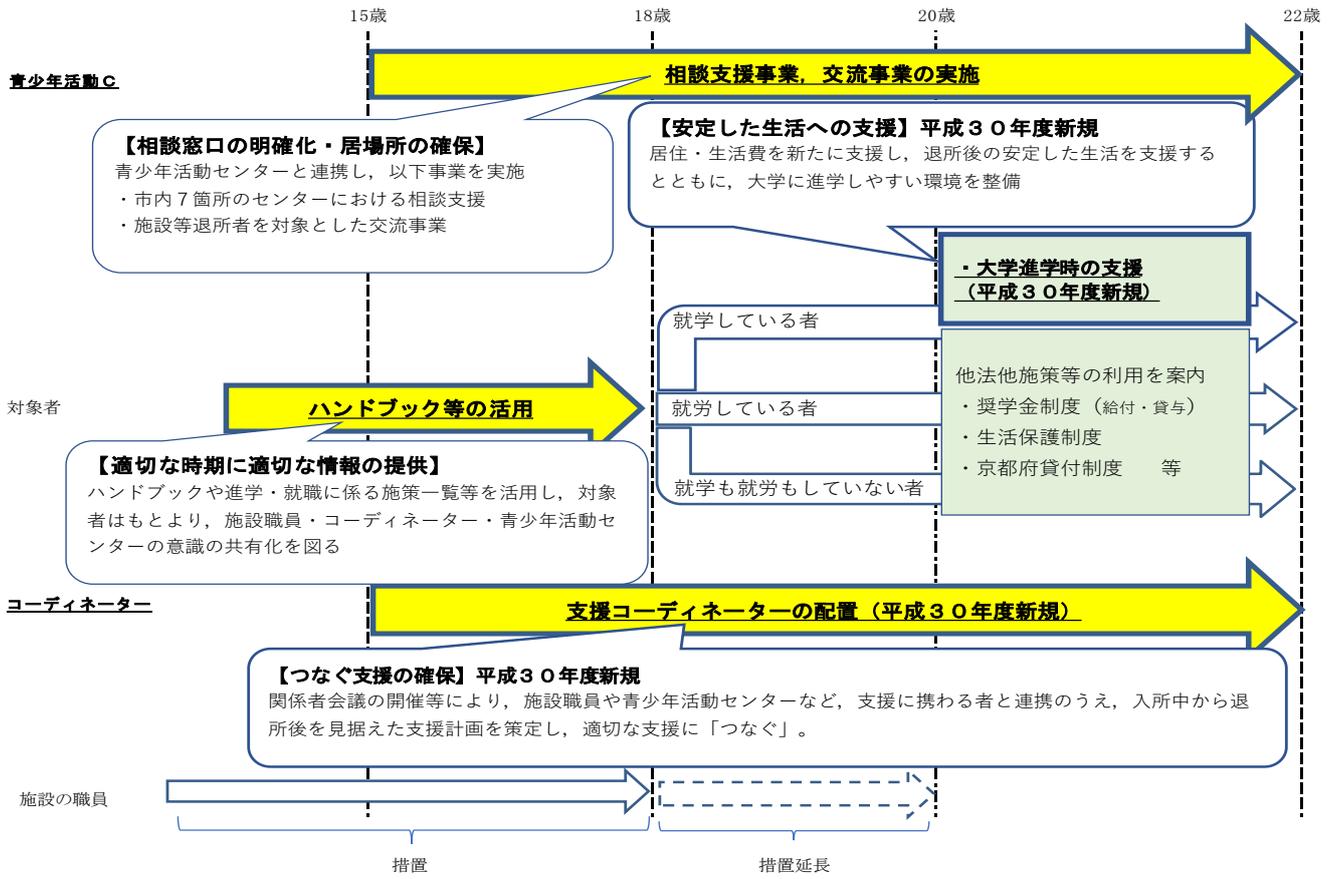
(2) 調査対象

児童養護施設，自立援助ホーム，ファミリーホームの退所者等

(3) 主な課題

- ア 相談窓口が分からない
- イ 相談相手がいないため，孤立してしまう
- ウ 支援策を知らない，活用をためらっている
- エ 必要な施策につなぐための支援体制が不十分 など

<充実後の支援>



推 薦 文

委員名 京都児童養護施設長会（京都聖嬰会） 北村 俊樹

私が児童養護施設に入職してから15年が経過しました。

この15年で出会った児童との関わりにおいて、最も困難を感じていることは退所後の支援でした。退所後の支援は退所してからでは遅く、入所中に少しずつ困難な状況に直面した時のシミュレートや対策について学ぶ機会を作っています。学びを提供する際に、職員の個々の特性や価値観によって支援のバラつきが生じていました。退所後の支援の標準化となるものは無いものかと、他の書籍を個人的に使用していましたが、そんな時に、このハンドブックの編集に携わる機会を与えていただけのご依頼を受けました。

このハンドブックの魅力は、事前に退所者へアンケートを実施し、退所者の声が反映されていることと、退所者の多くが退所直後に生活をする京都についての相談窓口が記されているところにあると思います。

退所者の声を聞くことで、私たちに求められていることが何なのかを、より具体的に知る機会になり、それが活かされた仕上がりになっていると思います。また、相談窓口が京都に特化して記されている点で、相談機関が少しでも身近に感じられるのではないかと思います。例えば、“075”で始まる電話番号を見るだけでもハードルは下がると思います。

退所児童の活用はもちろん、退所児童を支援する我々施設職員の活用頻度も増え、支援の幅が広がっていくことを願っています。

推 薦 文

委員名 京都市ユースサービス協会 清水 方人

イラストによる視覚化や、文言の整理等、「若者が見る」ことを意識した作りになっています。

お金や生活，食事のこと等，具体的な困りごとだけでなく，余暇の充実や人間関係，恋愛に関すること等，子どもから大人に至る過程である若者期特有の“揺らぎ”の部分にも着目しています。

かれらが社会に出た時に一人で全て背負わなくても良いように，思い立った時に開いてもらえるハンドブックとして役立つものであると考えています。

推 薦 文

委員名 京都市社会福祉協議会 木俣 紀子

だれに？どんな時に？手に取ってもらおうハンドブックなのか？そこから編集会議が始まったと記憶しています。

船出に近づいてきた人，船出を迎える人，船出したけれど少し迷っている人，そんな人たちの「ナビ」になればと。テーブルの上に置いてあったら手に取ってもらえる「ナビ」になればと。

あれも必要？これも知っておくと役立つかも…沢山の事柄が浮かびましたが，一番伝えたいのは，「ひとりじゃないよ，いつでも相談にのるよ。」というメッセージです。

ハンドブックを手にしてくださった皆さんが立ち寄ることのできる「港」として，これからもお付き合いさせていただきたいと思っています。ありがとうございました。

推 薦 文

委員名 京都市社会福祉協議会 小野 恵以子

ハンドブック作成にあたり、「児童養護施設等退所者アンケート」を読ませていただき、ここに寄せられた退所時の戸惑いと不安にできるかぎり応えたいと思う一方で、多岐にわたる情報すべてを載せることも、それを読みこんでいただくことも簡単ではないだろう、とも思いました。

そこでまず、ハンドブックを手にすることで『退所する＝一人ぼっちになる』ではなく、『困った時は一人で抱え込まず、相談していいんだ、たくさんの応援があるんだ』と感じられるものにしたいと思いました。

そのため委員会では、船出を迎える若い皆さんがまず手に取り「実際に使える！」と思えるような情報の精査とともに(料理メニューに妙に力が入っているのはそのせいです)、イメージしやすい場面設定や、伝わりやすさ(マンガ、写真の活用、言葉の選び方など)についても議論させていただきました。また、一人暮らしをする方も、そうでない方も、就職する方も進学する方も、男性も女性も、退所される全ての皆さんに向けたハンドブックとしようとの思いを持って、記載内容やタイトルの検討もしたところです。

このハンドブックを手にした皆さんが「これは私たちのためのものだ」と感じ、船出の力にしていただけたら本当にうれしいです。そしてもし少しでもそう感じていただけたなら、それは退所者の皆さんがアンケートで聞かせて下さった忌憚のない声があったことだと思っています。

ハンドブックの作成に委員の皆さんとともに関わったことは私自身にも大きな学びの機会となりました。ありがとうございました。

児童養護施設等退所者の生活状況及び支援に関する調査の結果について（概要版）

第1 施設退所者へのアンケート調査の結果（調査I）

1 本人の属性等

(1) 年齢，性別

- ・ 本人回答が，約9割であった。
- ・ 平均年齢は，22.0歳であった。
- ・ 「女性」が約6割，「男性」が約4割であった。

(2) 入所していた施設の種別，入所期間

- ・ 回答者の約9割が，児童養護施設の出身者であった。
- ・ 5年以上入所している者の割合が約7割であった。

2 現在の生活状況等

(1) 生活状況

- ・ 京都市内在住者の割合が約7割であった（府内を含めると約8割）。
- ・ 約6割が民間賃貸住宅で生活しており，家賃・ローンの月額は，5万円未満の割合が約6割であった。
- ・ 独り暮らしの割合が約4割，子どもがいる世帯が約2割弱であった。
- ・ 転居経験のある者の割合は約5割であった。
- ・ 手取りの収入については約8割が20万円未満であった（15万円未満は約5割）。
- ・ 就労形態が非正規である者の割合は約5割であった。
- ・ 公的年金の未加入者，加入状況が分からない者の割合が約3割であり，医療保険の未加入者，加入状況が分からない者の割合は2割であった。

(2) 進学状況

- ・ 高校を卒業した者の割合は約7割弱であった。高校中退者は約2割強，高校に進学していない，できなかった者の割合は1割以下であった。
- ・ 高校を中退した主な理由は，「人間関係」「目的を見出せない」「授業についていけなかった」であった。
- ・ 大学等に進学した者の割合が約1割であった。一方で，進学するつもりがなかった者が約3割，進学したかったができなかった者が約1割であった。
なお，進学したかったができなかった者全員が，経済的理由を要因の一つに挙げていた。

(3) 就労経験

- ・ これまでの就労経験は，正規・非正規を合わせて約9割が「あり」と回答している。このうち，転職経験のある者が約4割，離職し無職となっている者の割合が約2割弱であった。
- ・ 転職・離職の主な理由としては，「職場の人間関係」「労働環境が苛酷だった」「仕事のやりがいが見出せない」であった。

3 退所後の状況等

(1) 不安や困りごと

ア 退所直後（約3年間）の不安や困りごと

主なものは、「生活費等の経済面」「仕事に関すること」「親等との関係」「孤独感」「心身の健康面」「学校や職場での人間関係」であった。

イ 現在の不安や困りごと

主なものは、「生活費等の経済面」「仕事に関すること」「親等との関係」・「心身の健康面」「住居に関すること」「孤独感」であった。

(2) 退所した施設との関わり，相談相手等

- ・ 退所した施設等との連絡状況については約9割強が連絡をとっており，その内容は「電話やメール，手紙等」が7割，「施設等の訪問」が4割強，「施設の職員や里親と食事等，外で会っている」が4割弱となっている。
- ・ 具体的な相談相手としては，「施設等の職員」が約7割であり，そのうち，連絡をとっている人は「退所時に担当だった職員」が約5割弱であった。その他，「施設等以外の友人・知人」「施設等の友人・先輩」が続いている。
- ・ 「相談相手が欲しい」「相談相手は不要」という回答が約2割であった。
- ・ 気持ちが安らぐ場所や趣味，活動は，約4割が「ない」，「わからない」と回答している。

(3) 必要な支援等

ア 施設等入所中に教えて欲しかったこと

主なものは、「諸制度(年金，健康保険，住民票等)の知識や手続き方法」「炊事(料理)の方法」「金銭管理，銀行の利用方法」「住宅の手続き」であった。

イ 就職活動に関して施設等から支援してほしいこと

主なものは、「資格(運転免許や介護ヘルパーの資格等)取得のための手助け等」「仕事に必要な知識・技術などを身につけるための手助け等」「能力や適性にあった就職先のアドバイス」であった。

ウ 進学に際して施設にしてほしい支援

主なものは、「入学金，学費等の経済的支援」「連帯保証人，身元保証人の支援」であった。

4 その他（青少年活動センターの認知度）

- ・ 青少年活動センターについては，約5割が「知らない」と回答しており，「知っているが利用したことがない」が約2割だった。

第2 施設退所者へのヒアリング調査の結果（調査Ⅱ）

1 退所後の困りごとや不安なこと

「親等との関係」「生活費等の経済面」「仕事に関すること」「人間関係」等の内容が挙げられていた。

2 入所中に教えてほしかったこと、支援してほしかったこと

「諸制度（年金、健康保険、住民票等）の知識や手続き方法」「料理」「人間関係（人との関わり方等）」、「独り暮らしについての知識等」「就職先のアドバイス」など、社会生活をするうえで必要となる一般常識等を身に付けるための支援が挙げられていた。

また、退所後に「相談する所がどこか分からない」という意見があった。

3 必要だと思う支援

「退所後も受けられるカウンセリングや生活についての支援をしてくれる施設退所者専用のサポート機関の設置」「施設入所経験のある人たちの交流の場」「年齢を過ぎても施設で過ごせるための支援」が挙げられていた。

第3 施設職員へのヒアリング調査の結果（調査Ⅲ）

1 支援を行うに当たっての課題・問題

- ・ 現状において、退所者支援担当職員がおらず、各職員が余裕のある範囲で実施している。施設として、組織的、体系的な支援ができていない。
- ・ 公的な相談施設等、用意された場所には行きたくない。
- ・ 児童自身が、支援が必要な状況かを判断できず、支援を求められないまま状況が悪化してしまうケースが多いため、積極的な支援が必要だと感じる。

2 必要だと思う支援

- ・ 一般家庭の子どもなら親に相談するようなことを受け付けてくれるような相談窓口が必要である。
- ・ 経済的な支援はもちろん、居住の確保に関する支援（身元保証人の確保）、就労先を紹介してくれるような機関の設置、退所する前に公的手続き等について伝える仕組みが必要である。

施設退所者の生活状況及び支援に関する調査に係るデータ等（抜粋）

第1 施設退所者へのアンケート調査

◆退所後の困りごとや不安なこと（退所直後，現在）（複数回答）

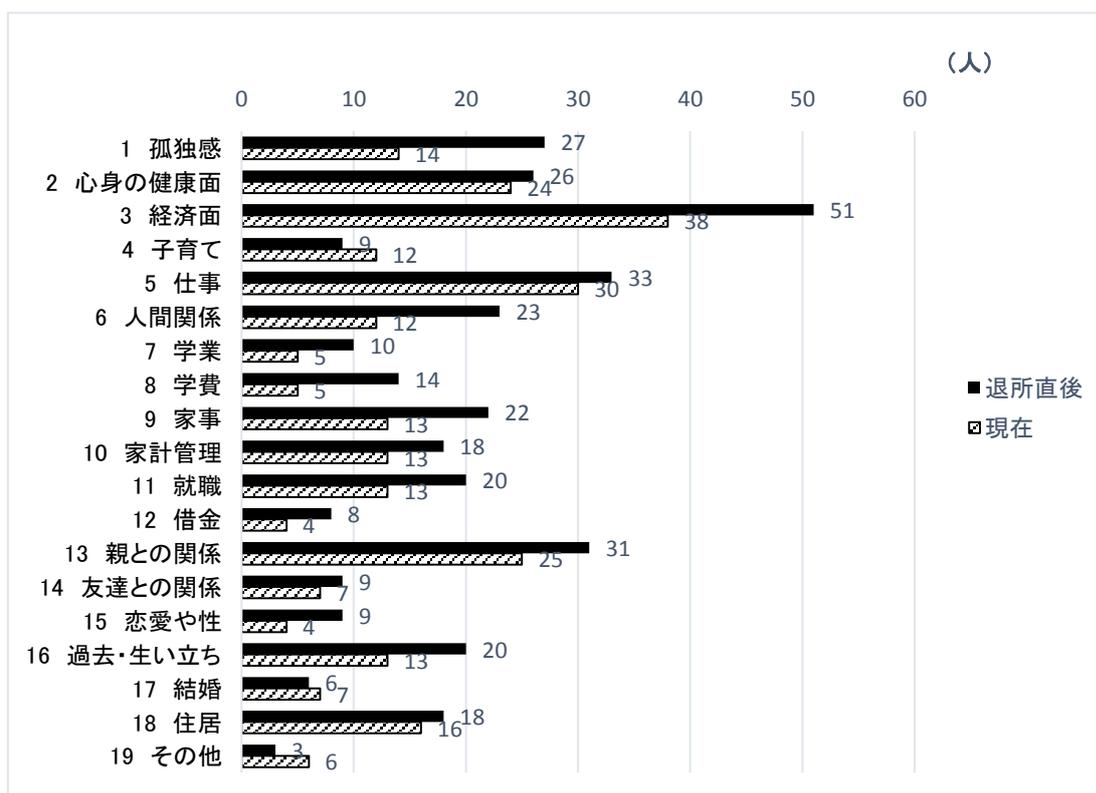
（退所直後）

回答者91名（有効回答者数は79名）のうち、上位6つをみると、最も多かったものは「3 生活費等の経済面」であり、51名（56.0%）であった。次いで、「5 仕事に関すること」が33名（36.3%）、「13 親等との関係」が31名（34.1%）、「1 孤独感を感じる」が27名（29.7%）、「2 心身の健康面」が26名（28.6%）、「6 学校や職場での人間関係」23名（25.3%）の順であった。

（現在）

回答者91名（有効回答者数は73名）のうち、上位6つをみると、最も多かったものが「3 生活費等の経済面」であり、38名（41.8%）であった。次いで、「5 仕事に関すること」が30名（33.0%）、「13 親等との関係」が25名（27.5%）、「2 心身の健康面」が24名（26.4%）、「18 住居に関すること」が16名（17.6%）、「1 孤独感を感じる」が14名（15.4%）であった。

退所者の困り感・不安感の経年比較（n（退所直後）=79，n（現在）=73）

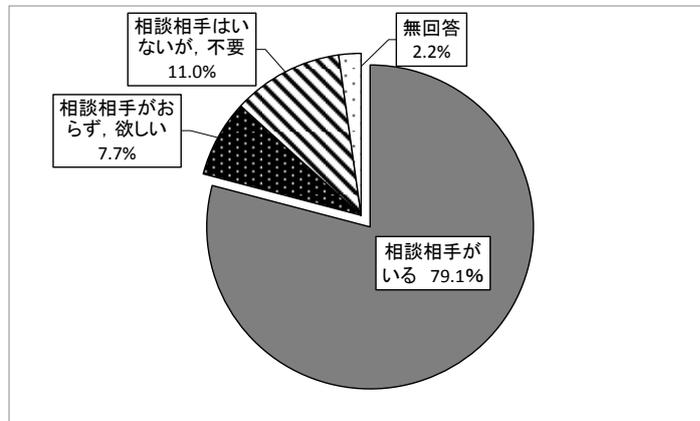


◆困りごとや不安を相談できる相手

(相談相手の有無)

回答者 91 名のうち、「相談相手がいる」が 72 名 (79.1%) ，「相談相手がおらず、欲しいと思っている」が 7 名 (7.7%) ，「相談相手はいないが、必要ないと思っている」が 10 名 (11.0%) であった。

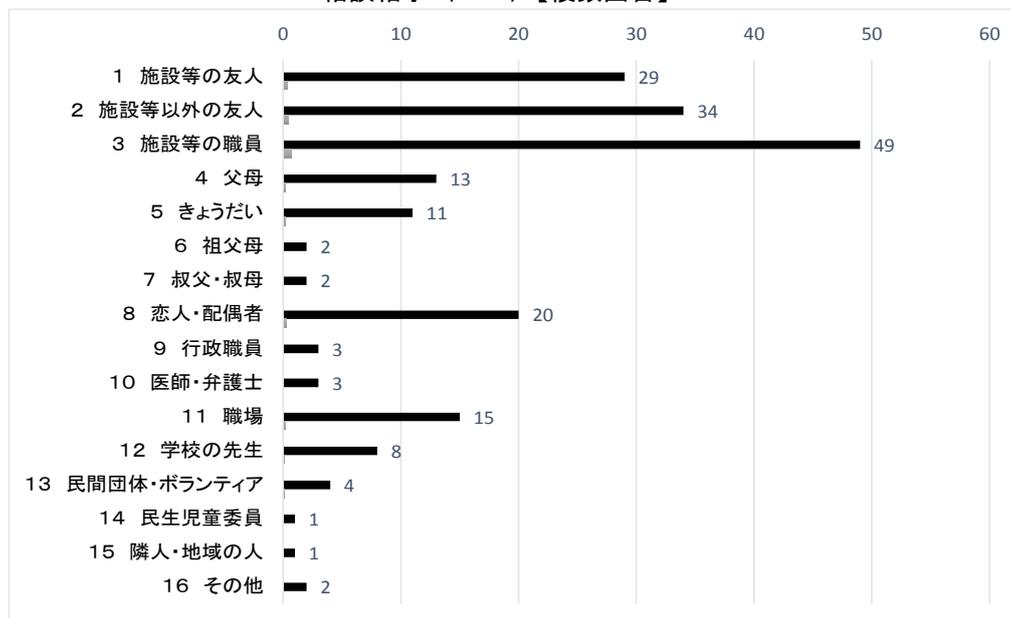
相談できる相手の有無 (n=91)



(相談相手)

相談相手について多かった上位 5 つをみると、「3 施設等の職員」が 49 名 (68.1%) と圧倒的に多く、「2 施設等以外の友人・知人」が 34 名 (47.2%) ，「1 施設等の友人・先輩」が 29 名 (40.3%) ，「8 交際中の人又は配偶者」が 20 名 (27.8%) ，「11 職場の上司や同僚」15 名 (20.8%) と続いている。

相談相手 (n=91) 【複数回答】

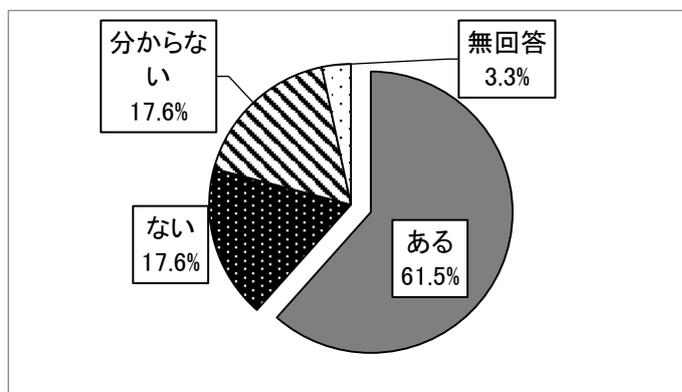


◆気持ちが安らぐ場所や趣味、活動

(場所や趣味、活動の有無)

回答者 91 名のうち、気持ちが安らぐ場所や趣味、活動が「ある」という回答は 56 名 (61.5%) であった。

気持ちが安らぐ場所や趣味、活動 (n=91) 【複



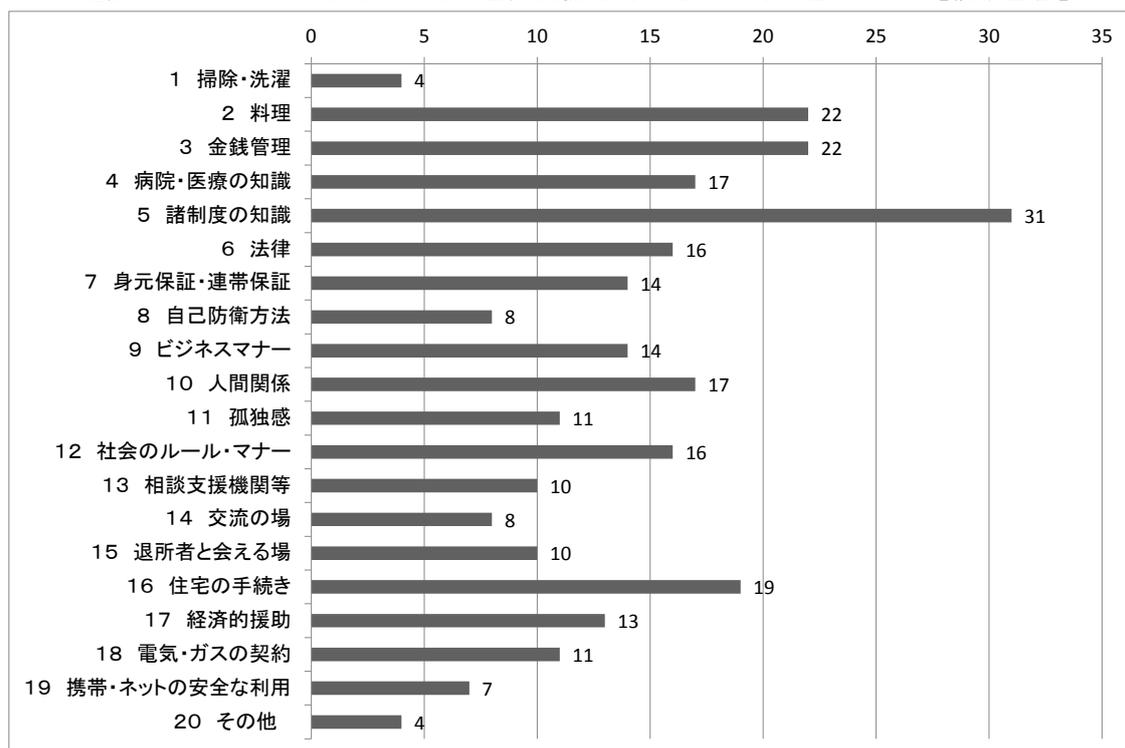
(ある場合の内容)

「家・部屋で過ごす」ことや「友だち・仲間」に関する内容が多かった。このほか、「音楽・ライブ」、「スポーツ・身体を動かすこと」、「ゲーム」、「仕事・職場」に関する内容等が挙げられていた。

◆入所中に教えてほしかったこと、支援してほしかったこと (複数回答)

回答者 91 名 (有効回答者数は 73 名) のうち、最も多いものは「5 諸制度 (年金, 健康保険, 住民票等) の知識や手続き方法」31 名 (34.1%) で 3 割を超えている。次いで、「2 炊事 (料理) の方法」と「3 家計の収支など金銭管理, 銀行の利用方法」がそれぞれ 22 名 (24.2%) であった。

施設入所中に教えてほしかったこと、支援してほしかったこと (n=73) 【複数回答】



◆必要だと思う支援（原文のまま記載）

- ・ 退所後、20歳までの保証人や契約の管理。
- ・ 施設を出てからの1番大変だった事が孤独感でした。戻ってきても良いと思える場や相談できる場があれば、安心できた様に思います。
- ・ 退所後に退所した子どもを支援する機関が欲しい（カウンセリング、経済的な援助）
- ・ お金の支援は最もだけれど、退所後も相談できる場所が必要だと思った。相談できる大人が必要だと思った。どうしてもなくなってからでは行動できない場合も多いので、日常的に繋がれる大人や支えてくれる人たちが必要だと思う。一度失敗しても、やり直せる安心感や環境があると頑張れる。
- ・ お金の支援。親や親せきとの付き合い方の知識。または助言してくれる人。健康保険や年金などの知識。選挙などの知識も。社会に関わる全般の知識が足りない気がする。自分を守ってくれる法律や、使える制度や仕組みなどを知りたい。頼ることも大切だけれど、20歳を超えると自分でなんとか活用できる制度もあるので、知っているとう安心感が増す。
- ・ 学校とは別で資格をとれるような環境がほしかったです。習い事や塾にかよいたかったです。
- ・ アフターケア、来ると言いながら来なかった。電話したら連絡は来るけど、さみしかった。約束は守って欲しい。
- ・ 施設を出たからといってほっとらかしにはしんといてほしかった。交流がほしかった。
- ・ 退所後のアフターケアをもっとしっかり、こまめに長期間おこなってほしい。

◆自由記述

- ・ 中卒で仕事が続かず困っている人はいますが自分から相談できずに困っていると思います。
- ・ 施設の際は、食事・光熱費全て考えることがなかったけど、全て一人でやりくりするのが大変でした。
- ・ 退所してからあまり施設から連絡がなく相談にのってほしい。
- ・ 施設を出てからの生活を、時々、様子を見に来てくれる人がいる方が良いと思います。
- ・ 仕方がないことだが、知っている職員の方が居なくなるため帰りづらい。
- ・ 退所した子どもに対する機関が欲しい。進学できているが、サポートが必要でない、ということはない。親族に、精神、金銭的な面で頼ることのできない環境のため、このような環境に詳しい人とつながりを持ちたく思う。その一環として、職業適性や就職、学業相談ができ、地域と連携してサポートする機関がほしい（ハローワークとは別）。

施設退所者へのヒアリング調査

◆退所後の困りごとや不安なこと

- ・ 独り暮らしをして先が見えず、不安が大きかった。
- ・ 生活費がなく困っていた。
- ・ 身近に相談できる相手がいくなり、ストレスを解消することができなくなり、しんどかった。
- ・ 仕事と独り暮らしの両立がしんどかった。
- ・ 料理をできる余裕がなかった。
- ・ 職場の人間関係がともしんどい。
- ・ 仕事に就きたいが、なかなか行動できない。

◆入所中に教えてほしかったこと、支援してほしかったこと

- ・ 料理
- ・ 人との関わり方
- ・ 自分に合う仕事を知りたかった。仕事探しを一緒にしてほしい。
- ・ 公的手続き（年金・健康保険等）の方法を教えてほしい。
- ・ 相談する所がどこか分からない。
- ・ 社会制度・・・こんな所行ったらこんな支援してもらえるよとか。
- ・ 独り暮らしについての知識を教えてほしい。

◆必要だと思う支援

- ・ 退所してからも受けられるカウンセリングや生活についての支援の機会、サポートの機関がほしかった（施設を退所した人専門の）。
- ・ 施設入所経験のある人たちの交流の場が10月からできるのは良いことだと思う。
- ・ 今思ったら施設はよかった。18才過ぎても良かった。

施設職員へのヒアリング調査

◆支援を行うに当たっての課題・問題

- ・ 組織的、体系的にアフターケアができていないことは課題だと感じる。
- ・ アフターケアが、施設としてではなく、職員個人の業務になっている。基本的に勤務時間外の対応となり、食事等に行った場合でも自己負担となっている。
- ・ 本当に支援が必要な人は、積極的に相談窓口に来れない人が多いので、支援等に繋げるためには、仕掛け作りが必要になると思う。

◆必要だと思う支援

- ・ 一般家庭の子どもなら親に相談するようなことを受け付けてくれるような相談窓口が必要である。
- ・ 経済的援助の拡充が必要である。
- ・ 居住支援
- ・ 困りごとを共有、明確にすることで安心感が生まれると思うので、同じ境遇の人同士が集まる交流の場があることは大切だと思う。
- ・ 組織的にアフターケアを実施できるような職員体制の確保が必要である。